

074
133,2
2册 内2

催淚集

催淚集 (取道明進情詩歌集)

Y28
加
食
内

Y289
九五



佐
壽

074
199, 2
2册 内

住所	年月日	寄贈者	寄贈圖書票
椿 東 椎 原	昭和四年十二月一日	杉 道 助	

煙海

丁酉年
通禧





淚集

故楫取道明君追悼

往事催淚

伯爵 東久世通禧

つくつくと過し月日をまればふの涙はいつを限りあるらん

男爵 高崎正風

あゝ浪の思ひのけつるものかたり聞たひにこそ袖濡しけれ

公爵 毛利元徳

まのまに逢つる人を思ひ出て袖の露こそかわのさりけれ

公爵夫人 近衛貞子

年月と遠さかれともおもひ出て落る涙をどゝめあねつゝ

侯爵 鍋島直大

涙のゝ先に立つゝいひ出むことのももなき君か上のあ

侯爵夫人 同 榮子

君の爲遠き島根にはあかくも消し人こそかあしかりけれ

侯爵 前田利嗣

この袖も露けかりけりあゝ浪にはかかく消し君を思へそ

侯爵夫人 同 朗子

あゝ浪のよする島ねにはかかくも消ふし君を悲しかりける

侯爵夫人 蜂須賀隨子

思ひきや文ひろめむと分入りしいそらの原に身を捨むとそ

子爵夫人西四辻茂子

そのときの今はれ心くもくしてまのふ涙のはる、日もあし

伯爵 津 輕 承 昭

大船の楫取も浪にくとのれてまつみ果しう涙ふりける

伯爵 松 浦 詮

高砂の山下風の音きけへよその袂も露けかりけり

子爵 長 岡 護 美

島風に吹くさかれしさくら花おもへうてにちる涙うか

伯爵 大 谷 光 尊

つくくとふりし昔しを忍ふれば涙の露れのはくまもあし

子爵 風 早 公 紀

見し夢のさめてはのあき袖の上に忍ふ涙はこほれぬるのあ

子爵 前 田 利 啓

荒浪にくさけし君のありさまをつたへきくとに袖は濡けり

子爵 押 小 路 公 亮

その友のあき跡とひし君もまたおあし涙の種とかりにき

子爵 竹 屋 光 昭

人傳に聞も涙そこほれけるきみとまかりし時を思へそ

子爵 本 多 忠 貫

今も猶袖に涙れおつるかあはうかく消し君を思へそ

子爵 池田 政禮

今も猶袖は涙にぬれにけり露と消にも君をおもへ

子爵 水野 忠敬

今も猶露と消にしその上を忍ぶ涙に袖そぬれける

長谷 信成

過しよを語るにつけて更にまたふりそふものは涙ありなり

前田 利聲

涙こそまつこゝろきけれかくはしき名は高砂の島よ残れは

南郷 柳子

國のためうせにも人のをしまれて知もあらぬも袖濡しけり

岩崎 寧子

雨とふる涙をうけて三笠山あふくは君のいさをかりけり

西三條 實義

露のまよきえよし人の忍はれて涙に袖もひちまさりつゝ

松平 健子

國の爲すてし其身を思ひやりてこゝろ、涙かはくまもあし

保科 節子

枯よけるふみの林れおとつれを聞くわろ袖そ露けのりける

宮地 巖夫

ふりにとを思ひかへして君の爲もろくこほるゝわか涙のを

北郷久政

涙こそ先つこほれけれつとへ聞くきみう今はの時を思へは

北島いと子

白露とはうかく消し君の上をおもへは今も袖そ濡ける

阪正臣

佛もかみたと共に浮ふかかたまとくたけし君を思へは

小出燦

くちをしのおみたも袖に海をかすしまゐに消し君を思へは

中牟田常子

おのつゝら袂露けくかりにけりはかかき君の上を思へは

〇四

常磐井文子

かき君の昔し語りを聞まゝに涙こほさぬ人ありけり

大谷籌子

かき人の昔語りを聞まゝに涙こほらぬ袖あかりけり

小笠原艶子

ともすれの遠き島ねの忍はれてはるともいとす露けりう鳧

原田蒼生子

高砂の島へ乃草におく露はすきにと君をこふる涙の

植松有経

つくくと思ひ出れば涙れみこほれてものもいはれさり鳧

荻原嚴雄

鯨よるえそかちしまも俱に見し昔思へともみたくましを

大口鯛二

涙にそ先むせひける口惜くかふとりのりける君をこのひて

鎌田正夫

身を捨て君のあたりし仇浪のおと聞度にそてそ濡ける

松浦辰男

あけろふのもゆる春日と成ぬれと猶もか袖の露はかはかす

松本高明

おくられし君か玉章とり出しあみとよ袖をぬらしつるかあ

〇五

加部嚴夫

國の爲名を高砂にあけつれと思ひ出ればかふしありけり

宮崎幸麿

今ハよにのこきと乃は草の花いつれあみたの種ならぬかは

遠山英一

仇浪のそちのさハきにうたのたの泡と消にし君をしそ思ふ

友野長祥

身を捨て高砂島にとめし名を思へは今も袖濡しけり

岩崎勝從

すきし世を忍ふ涙に言のはの花もしをる、心ちこそすれ

田村勝貞

思ひつゝあはてすきしに君は今世にあき人と聞そかをしき

伊藤小舟

過行し名は高砂の島なら歸らぬ君にあみたこほるゝ

服部磯子

ありしとらふ人も聞人もあみたに袖をぬらとけるかを

小川直子

おもふとち袖こそぬるき道の爲過にひとを思ひ出つゝ

中島歌子

高砂の島根はるかに思ひやりて落るあみたも止らさりけり

〇六

春哀傷

境 二 郎

うめの花また身に散し音信にことしはあはれ春としもなし

中村祇歡

あくはとき名のく残して脆く散る花に比ひし君をしそ思ふ

半井成質

咲花に君を忍へゝ春雨のふるともあしに袖をしめきる

福原俊彦

まどあせしその面影の忍はれてはるさめ淋しまつもとの庵

板垣義成

ちりぬれと名をはとめて世に薫る花の雫に志のふ春かを

兒玉源吾

もろく散る花につけても忍ぶる、常なき風にさそはれし君

八谷清

玉ゆらの露は命はかけろらふとはおかく消し若草の上

赤川三介

たむけんとむすふ袂にのほりけり散てかへらぬ梅の下みつ

市原官藏

行く雁の雲路をみても古郷にかへらぬきくの春やかあしき

藤田廣見

有と世をおもひつゝけて春の月むらへらうかふ君か面かけ

河名淨震

忍ぬれは君の別れを驚もしりてものうき聲に鳴らむ

中所伸子

春の雁雲路をるのに消えぬともおもかけハ猶世に残りつゝ

松浦芳子

そかあくも散よしはあのしのされて涙にくもる春の夜は月

藤田柳子

死出の山あどとつねてや今も猶こえにし君をよふこ鳥をく

木村ひさ子

たちあたる野への霞を見るたにも消し烟りの跡をしそ思ふ

長井操子

一むらの霞となりてあしきかくきえにし人の跡もと、めす

岡のふ子

春の夜ののすめる月もあき人を忍ふあみたにぬる、貌ある

藤田鶴子

散はるゝ咲のれともそくなきとめへらぬ君の別れあり鳥

三浦清子

鳥へ野にたちし烟は春の日のあまみにのこる空のしら雲

河名さか子

世の中はゆめ現ともわらぬかあつねあき風にさそそれと花

〇八

山根この子

いさやまた盛もまたて櫻はあ思はぬ風に散しはかあさ

道明君の臺灣にてとからさるるに遇てみまかられしを

きゝて弔らひまをすどて 公爵 毛利元徳

いのばかり悲あるらんよそに聞吾さへいと、悔しきものを
たのさこの山の嵐にをれ果しこのきの松のいたまときあな

道明君のことを承りて 公爵夫人 毛利安子

悔しともくやしあるらん國の爲すてし命ちと思ひあして

楫取道明君をうかしみて 子爵 福羽美静

魁しいきをは千代にのこれとも果なくありし君そかきしき

牧野伸顯

秋またてみどりなからにもみちはのあたふる風にちりゆくそおし

子爵 杉 孫七郎

まつらるゝ親のこゝろにさきとちてうゝるもかなしやまをてして

みす子ぬしのもとへとふらひ聞き参らすとて

千種任子

たかさこの露と消にし君の名ののこるにつけてぬるゝ袖のな

これさへもあみたに袖をしほるなり君かこゝろのおもひやられて

近藤芳介

〇九

天の原霞にむせふ月みれはたまの行へのこゝちこそすれ

我もわの子を失へるこゝちして君のかけきをさそふとそおもふ

井關美清

國のよめつくしゝ身そとおもひてもつきぬは君かかけきあるらむ

松本高明

玉の緒は兇賊の島にきゆるともきみの績はあかくつきあむ

楫取道明君の臺灣にて戦死とまひしを

いとをこみ侍りて

中澤信子

武士のやまどこゝろの花の香をちりても世々に猶や匂ひむ

此たひの御歎を深くおもひやりまゐらせて

いうにしていひ慰めむ側近くみとりてたにも悲しきものを

楫取道明君の遺稿ときこえし新日本言語集

を給はりしに

國の爲こゝろ盡し、ことの葉の花にも露をかけてこそみれ

道明大人の臺灣におゐてみまかりけるを

いとみて

矢 田

齊

おもひきや日本ふかひく島國の煙と君か消えはてんとは

楫取道明君の臺灣よて御のくれ給ふを

いたきて

柴 田 革 凡

功を遠き芝巖の學ひ舎に残し、君の名こそ朽せぬ

〇十

道明君臺灣よて禍つ災にかゝりて

身まのりとまふをいたみ侍りて

楨 舍

あはれ世に思ひきや君そのかみの別れをやかて死出の旅とそ

道明か臺北にてうち死すと聞て

男 爵 楫 取 素 彦

のほるへきよそちの坂をよそにしてかひなくきえし身こそをしけれ

高砂の尉と姥とにこと問はんとかあてと子のゆく趣いかにと

ふる郷に歸りみち明をおもひいて、

橘のしけるやちまたゆきかへりしのふとか子にあふよしもかあ

おもひきや夏の木たち山のけに新ひおくつきを添ぬへとは

悼楫取道明君

子爵

杉

孫七郎

自古男兒甘苦辛。常期臨難致吾身。一朝埋骨蠻烟底。應作千秋護國人。

悼楫取道明君殉節于臺灣二首

島地默雷

挺身決起役臺灣。誓以斯文化庶頑。何料一朝逢禍難。淋漓空見血痕殷。訃音字々淚闌干。想像當時事太酸。一死千秋長不朽。芳名留得入芝蘭。

哭楫取道明君二首次韻

三谷仲之助

生全孝義死忠純。萬里南荒棄一身。誰料翩々華胄裡。

〇十一

率先殉難有斯人。

廣陵餞宴感情純。慰我長征百戰身。落日芝蘭山下路。嗟君反作不歸人。

弔臺灣總督府教官楫取道明氏以下

六士殉難於大屯山八芝蘭

土居通豫

大屯山八芝蘭。陰雲匝地腥風寒。何者蝨賊弄鐵火。戰血淋漓迸杏壇。六士手提冰三尺。叱咤斫敵伏屍積。生平教人不傷人。其奈奴輩之橫逆。六士一死復奚疑。殉國壯烈鬼神悲。永教後生知大節。如此忠臣即良師。

傷楫取某君任臺灣學官死土匪之亂次笠原百里翁韻

片山勤

訓誨群蒙極苦辛。亂餘况有賊窺身。知君一死名加重。
不讓沙塲暴骨人。

哭道明楫取賢臺

岡義亮

今日臺灣地。戰塵已掃餘。移風談孝悌。勸業說耕漁。何
計覆前轍。還教戒後車。嗚呼君一死。千載有名譽。

哭道明楫取君次笠原翁韻

波多野成

欲誅臺賊戴儒巾。重節輕生至殺身。赫赫名譽留絕島。
永爲忠義傳中人。

哭道明楫取君

〇十二

聞訃猶疑夢。乃知無覺期。忍悲探枯腹。咄出鄙俚辭。初
擢教官職。子弟日孜孜。賞罰適其道。紀律得其宜。戴教
如父命。感恩似母慈。又及匪徒起。提劍發講帷。勢如龍
蛇躍。氣似貔貅馳。思國侵萬死。忘身履千危。忠勇如金
鐵。奮鬪倒臺陲。忠也如此大。於孝豈有虧。一死兼忠孝。
永爲世人規。大節達天聽。直詔列官祠。英靈若有識。願
消憤怒思。何待忠刻石。千秋存口碑。何煩孝上筆。萬人
總皆知。我自辱交誼。屈指數年茲。對花同酌酒。觀月共
賦詩。讀書有不解。必問而決疑。論齡雖如子。於德殆如
師。嗚呼自今後。我惑相問誰。心中如暗夜。只悲無晴時。

弔悼楫取道明君

津田信好

龍孫已長六尺身。才豪宛是日東春。冲天宿志猶未果。
雄飛試遊南海濱。烈風疾雨瞬間起。曠野群山暗砲煙。
奮鬪擊破萬刃寇。討死不死魂進臻。君不見東洋第一
日本魂。忠魂千載留異域。赤心一死報聖恩。又不見舉
名顯親孝之終。永輝內外史傳裏。偉哉忠孝兩全躬。

恭奠楫取道明君之靈前

八谷清

去歲精誠出萩城。拋身王事敢求生。何圖土匪侵巽舍。
難奈賊兵襲陣營。清國狂風已雖靜。臺灣激浪未全平。
美名豈唯垂青史。特賜寵恩五位榮。

〇十三

悼正五位楫取君殉節於臺灣 藤井順教

憐君報國不思身。誓以斯文誨島民。誰識一朝逢禍變。
空爲明治史中人。

輓正五位楫取道明先生二首 葉壽松

爲人願祝百年期。許國忠臣莫可移。自是清議聲價貴。
名成八烈竟騎箕。

志節原來政教施。精忠毅魄簡編垂。羊公德大堪比美。

共豎鴻恩墮淚碑。

云建塔於學堂近處之地

弔正五位楫取道明大人 張柏堂

博潔光明柱石臣。文章自昔絕群倫。而今報國騎箕去。

悲悼先生及庶民。

兒奉職在臺灣本年一月土匪寇臺北勢頗猖獗兒遂殉節

因賦此以排悶

男爵 楫 取 素 彥

浮世看來是劫塵。悲歎點眼夢邪真。誰圖膝下弄環者。
忽化沙場暴骨人。

梅花細雨不勝愁。強遣餘哀試薄遊。豫想春風動楊柳。

妻兒應悔覓封侯。時余以轉地療方在相州國府津

吾兒三十九春秋。孤劍方爲出塞遊。殉國一朝終不返。
魂留鄭氏古墳邱。

不惑猶餘一。人言齡數奇。俗談休喋々。死職是男兒。

〇十四

賊衆如潮勢。單身不可支。揮刀輒相誓。勿誤殉難期。
暴骨沙塲語。生平應服膺。荒陬終一死。長剩血痕凝。
定離兼必滅。此理豈難知。祇是眼前狀。忍看婦女悲。
文武分班秩。忠君原不岐。却懷將教育。要補強兵基。
版圖草創際。施設事方紛。易俗移風政。何人先奏勳。
新年接凶問。土匪猾官廳。殉節如編史。或留姓名馨。
兒也餘塊肉。幼孫三個男。偏期成立後。繼父莫能慙。
家門賴文學。教育有淵源。今日斃其職。私情奚足言。
聖澤眞優渥。錄功無一遺。官銜補陞叙。身後荷榮滋。

恭懷楫取道明大人德政良明不憚固陋謹撰七
絕三首以誌不忘云
朱 俊 英

至性真情出本衷。恩膏廣渥徧瀛東。從來帝國多奇績。
終讓先生第一功。

東瀛見讓好施爲。大展經綸在此時。幸得恩公來變理。
群黎萬載頌良規。

奇材妙質脫凡塵。澤及吾儒又最眞。自此深恩銘五內。
歌功頌德一時新。

楫取道明君を祭る文

村 田 峰 次 郎

〇十五

明治廿九年二月廿六日故正五位楫取道明君の葬祭に當り
友人村田峯次郎哀悼誠を表し謹みて祭文を作り君の英靈
に告く嗚呼僕の君を知るもの實に三十有餘年その友誼甚
た久くと謂ふへし君と安政五年に生れ僕は安政四年に生
る少時の遊戯或は紙鳶を飛ハし或は竹馬を馳すその後ち
國費に入り雨夜燭を剔て同じく書を讀み霜晨寒を衝て俱
に劍を學ぶ當時の景情宛然猶ほ昨日の如し元治元年天下
騷擾國論鼎沸の際君の父君と俗論黨のとめに讒せられ僕
の父及ひ廣澤兵助君等と同時に獄に下らる又君の伯父松
島君は學識深邃頗る忠義の士とりしも惜かな是時早く奸

人のためよ害せられたり慶應二年幕府徳川氏天下の兵を
擧げて征長の役を興さんとするに臨み君の父君は今の宍
戸子爵と同じく藩命を承けて廣島よ使せられしに幕吏亡
狀遂に捕へて禁錮す僕の父もまた尋て廣島に使せり嗚呼
君の先妣君は松陰吉田君の令妹にして慷慨氣節を貴ふの
風あり是時君並に僕等少年輩に向て詢詢大義を説き君の
伯父吉田君殉難の行實及ひ僕か祖父の事蹟を語らるまた
君の父君並に僕か父の遭難の狀を説き且つ涙松集を讀み
て大に泣けり僕等誠に無心の少年と雖もその義風に感じ
君と俱に涙を濺き爲に志操を獎勵せるもの多しとすその

情況今に至て猶ほ忘るゝ能はさるあり是よりして大政維
新の後君は國費に入りて業を修め明治五六年の頃佛國陸
軍教師クロゼーに就きて佛蘭西書を學ひ尋て東京に來り
明治八年以降司法省各地裁判所太政官内閣愛媛縣農商務
省宮内省等の數官に歷仕し二十年十二月廿一日天顏拜謁
仰付けられ天盃を下賜せらる君和歌を好みその道に長す
るを以て廿一年十一月宮内省より歌御會講師御人數を仰
付けらる廿八年征清戰爭の際陸軍省雇員を命せられ尋て
大本營附と爲り臺灣總督府隨員として臺灣に至り民政局
學務部勤務を命せられ臺北府八芝蘭ある芝山巖の學堂に

於て諸生教育の任に當られ拮据黽勉爲に生徒の業大に進む新日本語集の成る君等の力亦與て多きに居ると云ふ本年の一月一日君同僚各員と俱に新年を賀せんかため總督府に至らんとし芝山巖を下り士林街を過くるとき匪徒蜂起すと聞き即ち學堂に還り諸公文書を整理して再び臺北に向はれしに途上忽ち匪徒の襲ふ所と爲る君等奮戦力を盡すと雖も衆寡敵し難く遂に戦歿せられしり學生等民政局に至り哭泣して具さよ君等戦死の狀を陳ふ仍て民政局より吏員を遣り君等の遺體を搜索し之を火して遺骨を收む民政局諸子本月第一日曜日をとし臺北縣廳の前庭に

祭場を設けて君等學務部員及び警察官殉難諸士のため盛大なる招魂祭典を擧げたりと云ふ是の如く我聞く初め君等の學堂に在るの日士人夙に匪徒蜂起の狀を覺り竊に告げて禍難を避けしめんとせしこと再三ありしも君更に堅執して聽かず後ち又下りて士林街に入るや警吏同しく君等をして迅に臺北に奔り災害を免れしめんとせしに君等復た之を肯せずして曰く予等職を此地に奉す固より生を期せず今や禍難に蒞み因循事を誤り怯懦任を辱しむるは大丈夫の深く愧つる所ありと徐に公事を理め防戦善くその職務に斃る嗚呼君の一門皆か正義を以て國難に殉ふ

君の死あるまゝ家傳の遺風と謂ふへし君か厄難に遭ひたるは固より哀悼に堪へずと雖も君か職責を全くと國士たるの面目を辱しめさりしは僕の亦歎賞措かざる所にして誠に教育家の良模範あり今後教育家たる者皆か死を以て職を盡すとせば人材を養成し學術を進達せしむるの大結果忽ち觀るへきあり嗚呼君に關する三十年來の往事を追懷せし恍として眞に隔世の想あり僕や偷安苟且碌碌瓦礫に同しこれ君に後れて未と死する能はざる所以僕もと蒲柳の質羸弱多病生きて世に補ひおしまた君の英靈に對して深く耻つる所あり君實に大義に頼り潔く國の爲に死す

聖明上に在りて優恩枯骨に及ひ光榮大に顯はる君の幽魂何ぞ忘るへけんや言窮りありて情盡くるなし君の英靈願くそ之を察せよ

明治二十九年二月二十六日

明治三十年五月七日印刷

明治三十年五月十三日發行

編輯者兼
發行

東京市赤阪區新阪町三十二番地

楫 取 三 郎

印刷者

東京市京橋區山城町六番地

堀 田 道 貫

電話本局 千四百七十七番

9



萩市立萩図書館



111530374

萩関係資料137